

# 明治の佐伯三青年 (三五)

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

大隈外務大臣襲撃さる

「危急存亡伯」と呼ばれた後藤象二郎は、同志を裏切って入閣し、世間をあつと言わせたが、首領を失った大同団結は、統制がとれず大同協和会と大同倶楽部に分裂した。

一方、憲法を制定し、皇室典範や議院法・衆議院議員貴族院議員選挙法や貴族院令を公布して、明年の帝国議会開設に備える黒田内閣は、これからの急務として、昨年失敗した条約改正を成功させなければならなかった。

そのため黒田総理は、政府攻撃の急先鋒であった後藤を懐柔して体制を整えた。この頃条約改正を担当する外務大臣大隈重信は、今までの諸国を一括して交渉することの不利を避け、各国個別に折衝を重ねて成案を得る作戦を立てていた。この作戦は順調に進んでいたが、どこか

ら秘密が洩れたものか、この改正案が突如としてロンドン・タイムスに暴露された。その内容は、

「日本の内地に雑居を許し、治外法権を撤去して領事裁判を廃するに先だち、日本は適當の外国判事数人を大審院判事に任じ、金額一百円以上の利益又は罰金に関する上告事件に参与せしめ、且つ原告若しくは被告の一方外国人なるときは、その裁判官の過半数は外国判事を用うべし、この方法は十年間を継続し、その満期後は、総て司法権の自由を得べし」

というにあると報道された。

この暴露記事が一度日本に伝わってくると、再び大隈外務大臣に対する非難の声があがった。大隈の改正案は、前年の井上案に比し、税権などは確かに国益を尊重するものであったが、今の日本の国力をもってすれば、司法権を回復するまで、十年間くらいは隱忍自重しなければならぬ、というのが本音であった。

ところが、領事裁判権は存続するし、大審院判事には外国判事を雇傭し、日本の面子は丸つぶれではないか、まして内地に雑居を許せば、日本国内が外人によって買収されるのではないか等、囂々たる非難がわき起った。

杉浦重剛、三宅雄次郎等の国粹保存主義者で固められた、日本新聞が急先鋒となって政府を攻撃すると、保守中世派の鳥尾小弥太に熊本の紫雲会・国権党、福岡の玄洋社もこれに呼応し、大同協和会・大同倶楽部もこの動きに連結し、反対運動は全国に広がった。

再び新聞による論戦が始まったが、大隈は母体となる改進黨員の要員がごとく政府入りし、改進黨の機関である報知新聞も人材が払拭し、矢野は見るに見かねて自然にこの騒動に巻き込まれることになった。

この時期、後藤を入閣させた犬養は、分裂した大同団結の会派を利用して大隈の支援に回ろうとしたが、このことが暴露されると、同志は犬養を変節者として除名しようとした。犬養はこれを不当として抗争したので、大同団結は更に四分五裂し、収拾がつかなくなっていた。この事態を心配したのが板垣退助であった。板垣は自由党を解散後高知へ帰っていたが、この事態を見るに忍びず、上京して調停に入ったが、二派の調停は容易ではなかった。ここで大同協和会は、板垣に再度自由党の再興を促し、連合を試みるが、却って大同倶楽部に邪魔され、

板垣は時節の到来を待つことにして、一旦帰郷することにした。板垣の入閣が噂されたのがこの頃であるが、これらの動きを知った矢野は、大隈邸にはせ参じて、秘書を通して官邸にいる大隈の意向をただし、政府部内の様子を探った。

報知社に入社しても、矢野はじっとしておれなかった。連日、改進黨の幹部が集まって対策を協議したが、一年の空白は大きかった。そして藤田の洋行も痛手であった。「茂吉がおればのう」

思わず口に出た。

「外相のこの挙は内閣成立の時から承知の上であろう。

よもや黒田や伊藤も、今度は裏切るまい」

内閣の支援を樂觀するのは小兵の島田三郎であった。

「そのことじゃ。内閣の支援が崩壊するとすれば、やはり後藤の線であろう。この線を注視せねばならぬが、裏で動くのは犬養じゃ。犬養から本音を引き出せるのは藤田なんだがー」

矢野はこう言って絶句した。

「よし。わしが当ってみる。何が何でも後藤に大隈を支援させるわい」

こう言って、犬養と後藤の線を引き上げたのは沼間守一であった。

「頼む。言論も必要だが、政界は駆け引きが先に動き出すんじゃ」

「それみたことか。引退など勝手にしやがってー」

矢野の言葉に、相変らずの毒舌がはね返ったのは沼間であった。

「そう言うな。わしも心苦しいんじゃ」

矢野が照れて、社の会議室に爆笑が起った。

六月十一日、日独改正条約の調印が発表された。

「矢野さん。大隈さんが強行しましたぞ」

興奮気味に、第一報を知らせたのは箕浦であった。

「実行しましたか。よしよし。内閣もまだまとまっている証拠じゃ」

矢野も喜びを顔に表したが、頭の方は政府部内の意志決定の方に働いていた。

「果してどこまで通せるものかのうー」

矢野はふと呟いたが、一抹の不安が本音であった。

矢野の不安を裏うちするように、この調印を知って、

各社の論駁が急にはげなくなったが、政府はすかさず二十八日には、東京新報の発行を停止させ、ついで日本新聞、東雲新聞、関西日報の発行停止を命じた。

「政府も捨てたものじゃないぞ」

社内はわき立っていた。

民権運動が起こって以来、幾度か弾圧を余儀なくされた報知社も、この時ばかりは、他社の発行停止に諸手を上げて歓迎した。

しかし、条約改正の反対派は、今度は建白書の呈出作戦に切り替え、密かに内閣の切り崩しにかかっていた。

矢野は民意を糾合すべく、全国の改進黨員に檄をとばし、建白書には請願書をもって対抗したが、七月二十三日、法制局長官井上毅が、改正に反対を唱えて辞意を表明すると、次第に雲行きがおかしくなっていた。

いつの世も条約問題は国論を二分する。たしかに法律的には不平等であっても、維新が成ってまだ二十二年しか経っていない。国自体の憲法がやっと制定されたばかりの国勢で、欧米の列強と対等にわたりあえる状態ではなかった。だからといって、封建時代の遺物である、幕府時代の条約を引きずったままでよいわけではない。大隈は

国益を考へて漸進主義を試み、この条約改正に命を賭けていた。

苦境に直面した黒田首相は、初めて条約改正の内閣会議を開き、上奏して勅裁を仰ぐことを決定したが、八月二日には、再度会議を開き、法官として任用する外国人は、帰化人であることの妥協点を確認した。

大隈は政府のこの意思統一をもつて、八日には日露改正条約を調印し、強引に自らの信念をおし通したが、頭山満、佐々友房は内務大臣松方正義を訪ねて改正の非を談じ、鳥尾小弥太は直接黒田首相に意見書を呈出する有様で、反対論者は個人を対象に直接行動にはじめていた。

こんな時に、矢野は忘れかけていた藤田から、ウィーンから発信した寄稿文と通信を受けとったが、藤田は見るもの聞くもの初めての見聞に忙しく、メモを取るのが精一杯で、約束した外遊見聞記は時間がないことわっていた。無理もない。藤田はシェークスピアを翻訳して日本に紹介して以来、外国文学や演劇に興味をもち、明治十九年には、末松謙澄が創立した「演劇改良会」に会員として名を列ねるくらいであったから、ヨーロッパ

に着いてからの藤田は、昼間は博物館や美術館を丹念に廻り、合わせて王宮や古城が日本とちがって一般に公開されていると知るや足を踏み入れ、夜になれば連日のように芝居見物に出かけた。勿論、六月には矢野にならつて、英国上下両院の議會を傍聴して英国の議會制度に接しているが、矢野が渡欧にさいして、新聞を研究したり、知名な政治家を歴訪したり、ロシアのシベリア鉄道に注目したことを考えると、この頃の二人の間には、かなりの人間的な趣向の違いを見せている。

藤田の寄稿文は、当時日本でも問題になりかけていた。裸体画の絵画彫刻と風俗の關係について、西洋画を通しての一見識であった。読物としては面白い美術論であったが、矢野はそれどころではなかった。藤田は留守中の九月五日に次女照子を授かるが、条約改正で燃え上がった国内情勢は、暑さも吹き飛ばす勢いで急変しつつあった。

建白書攻撃に続いて、各大臣の切り崩しを図る反対派は、今度は非条約改正で委員会を設けて諸派の結合をはかれば、条約改正派もこれに対抗して、新富座に有志の大懇親会を開いた。だが、数でおされそうになった改正派

は、改進黨を中心に、巻き返しをはかるべく、矢野は党委員を集めて協議した。

「どうであろう。このさい党の臨時大会を開いては―」

矢野はこう委員にもちかけた。

「一案じゃ。党の存在を万天下に誇示するのも意義がある」

早速乗り気になったのは尾崎であった。

「よし。そうなれば、条約改正の賛成決議を大会でとりつける」

決議案を出したのは島田であった。

「賛成演説をぶつとなると、一日ではすまされまい。弁士こそ多士濟々じゃ」

箕浦であった。

「なに。そうなりや、党務と決議の進行をわけて三日間ぶちぬけ。氣勢が上がるわい」

沼間の景気の良い一声で、臨時大会は決まったも同然であった。

「会長は矢野龍溪。引退した罰じゃ」

沼間がつけ加えて爆笑が起った。

こうして、改進黨の臨時党大会は、九月二十五日、浅草

鷗遊館で開くことにし、翌二十六日、二十七日は、場所をかえて新富座に移し、決議のための大演説会を開催することにした。

当日、矢野の音頭で万歳を三唱して始まった大演説会は、弁士九十名に及ぶ大盛会で、数千人の聴衆を集めて氣勢を上げ、日本新聞などは、紙上で各新聞社の旗色を鮮明にして論評を加える始末であった。

しかし、世論の大勢は日増しに反対派に傾き、政府部内においてもこの大勢に抗しきれず、大隈の立場は不利になるばかりであった。その矢先、閣内からやはり後藤が先頭をきって、条約改正反対の旨を上奏すると、この頃欧米視察から帰朝したばかりの、山県有朋も反対に廻って、急に閣内の雲行きもおかしくなっていた。この情勢を見て機を見るに敏な伊藤博文も、自ら創設した枢密院議長を辞めることによって、反対の意向を表明した。

こうして、大隈が入閣したさいの、最大の課題であった条約改正に対する、三人体制の一角が崩れた。矢野は法制局長官を辞めた井上毅や伊藤を私邸に訪ねて、必死に大隈の支持を要請したが、態勢はすでに固まりつつあった。

黒田首相は内閣の責任上大隈外務大臣を支持し、この難局を乗り切ろうとしたが、閣内の不統一は如何ともし難く、思い余って十月十五日、御前会議を上奏して議決を委ねたが、決裁に至らなかつた。大隈は四面楚歌の中でも、自らの信念を通して動じなかつた。

矢野は逐一これらの情報を受けながら、枢密院議員の間を走り回って説得につとめ、昼も夜も休む暇がなかつた。しかもこの頃の矢野は、葉研堀の報知新聞社が手狭になつたことと、霞ヶ関に遠い不便を感じ、内幸町辺りに社を移すことを考え、その候補地選びに執心していた。そして十月十八日午後、矢野は三木善八を伴つて内幸町に出かけ、地所を物色中であつた。

その時、午砲に似た鈍い発射音が日比谷一帯に響き、矢野は何の音かと訝しんでいると、間もなく人通りがぎわつてきた。その中を大声で駆ける者がいた。

「大隈卿が殺られた。爆弾じゃー」

矢野は「大隈卿」と聞いて色を失い、駆けだそうとしたが、三木は袂をつかんで離さなかつた。

「今顔を出しては危ない。暴漢はどこに潜んでいるかもしれません」

三木は必死に矢野をとめたが、矢野はこれを振り払うと、腕車をせき立てて大臣官邸に急いだ。

この日、大隈は閣議を終えて馬車に乗り、官邸に帰る途中、外務省の正門前で暴漢に襲われた。暴漢は福岡の玄洋社の同人で、来島恒喜といい、大隈の馬車目にかけて爆弾を投げつけ、大破を見届けるとその場で自殺した。

矢野がこの場に駆けつけた時には、木端微塵に壊れた馬車の残骸が横たわり、傍に誰かが倒れていたが、矢野は目もくれず官邸に急いだ。官邸の玄関は、数人の警官によつて嚴戒態勢を取られていたが、矢野は彼等を振り払うと、「大隈さんはどこじゃ」と大声を張りあげながら、一人の警官の指さす応接間に飛び込んだ。

幸いにも大隈は、秘書の加藤高明・鮫島武之助や二三の省員に取り囲まれていたが、命だけは取りとめていた。「矢野か。わしは元気じゃ。このくらいで死んでたまるか」

大隈は矢野の顔を見て気丈であつたが、丁度その時、門前を通りがかつた海軍軍医高木兼寛が急を聞いて駆けつけ、手当のために足を持ち上げると、足首がぶらりと下がつた。矢野は見るに見かねて顔をそむけた。

間もなく佐藤進等の外科医がかけつけたが、診断は足首の切断より他に道なしと一致し、その場で直ちに切断の手術が行われた。こうして大隈は遂に隻脚の人となった。

大隈は手術後四、五日して傷口が化膿し、一時危険状態に陥ったが、精神力でもち直した。

その頃、枢密院議長を辞職して、暫く東京を離れていた伊藤博文も見舞いに来た。丁度矢野もその場にいたが場所が場所だけに、むつかしい政治の話はでなかった。

ただ、伊藤の帰りぎわに、大隈夫人と矢野は、伊藤を玄関まで送ったが、夫人は、

「伊藤さん。この次はあなたの番かもしれませんよ」と、忠告した。

果して二十年後、伊藤はハルピン駅頭で凶徒のピストルに倒れたが、「伊藤暗殺」の号外を手にした時、矢野はこの時の夫人の言葉を思い出さずにはおられなかったという。

また、事件の翌日、福沢も見舞いのため矢野の邸を訪れ、

「もし幸いにして、大隈さんが命をとりとめたならば、

この事件は、後日大隈さんの総理大臣になる運命を定めたものになろう」

と話したが、後年その通りに大隈内閣は実現した。

矢野は自らの晩年に、これらのことをエピソード的に語っているが、福沢も維新には数度暴漢に襲われている。明治という時代は、国家建設のために、自らの信念を貫くには命を賭けねばならなかった。福沢といい、大隈、伊藤といい、これら明治の先達に引き立てを受けた矢野は、幸運であったに違いないが、その場その場をふり返る時、さぞ感慨深いものがあつたであろう。

この事変を機に、条約改正の商議は一旦中止され、二十五日、黒田内閣は総辞職した。と同時に、内大臣三条実美が内閣総理大臣を兼務することになったが、勿論臨時の措置で、今度は地下で内閣の人選が潜行するようになっていた。

十一月二日、関西に下っていた伊藤博文と井上馨が、三条や内相山県有朋の指示を受けた野村靖・品川弥二郎等と、神戸で会談したのもそのためである。

その間十二月十九日には、再び高知から大阪に出た板垣が、旧自由党员の大懇親会を開いて愛国公党を組織し

大同協和会と大同倶楽部の調和をはかったが、大同協和会の大井憲太郎・新井章等は、板垣と袂を分けて自由党を組織した。これが再興自由党である。

条約改正が無期延期になると、再び政党的組織化が活発になってきたが、こんな時に、十二月二十四日、内務大臣山県有朋に大命が降下した。山県は内務大臣を兼任し、外務大臣には次官青木周蔵が昇格し、内閣の顔ぶれが一新した。

黒田や大隈は、伊藤のあとを追って枢密顧問官となったが、伊藤は宮中顧問官として大臣礼遇の優詔を賜わり、山県の後ろ楯には、伊藤・井上という長州閥が隠然たる勢力をもつようになった。

こうして、明治二十二年という年は、矢野にとって、条約改正でふり廻された一年であった。

明治二十三年が明けると、矢野は何はともあれ早稲田に大隈を見舞ったが、意外に大隈が意気盛んであったので安心した。

「顔色が大分よろしいようでー」

矢野の挨拶に、大隈らしい冗談が返ってきた。

「なに。顔色もよくなるわい。片足をとられたので、片足分の勢力が他へ廻るようになった。ますます健康になるわい」

「この分では、もう一度条約改正が出来ますな」

条約改正と聞いて、大隈はしんみりしていた。

「誰かがやらねばならぬのだがのう。いざとなると、わからぬ奴が多すぎる。それにしても皆に迷惑をかけたのう。あのまま押し切れれば、今年の選挙は一大勢力になっていたのだがー」

矢野もそのことは考えていた。

「今だから言えますが、この条約改正問題が起きる前、ある晩伊藤さんに呼ばれたことがあります。伊藤さんは今選挙を行えばどういふ結果になるかと心配の様子でした。わたしが躊躇なく、今なら改進黨議員が半数はとると申しますと、伊藤さんは、そうかもしれぬのうと、眉間に皺をよせておりましたー」

「そのことじゃ。党員にまた受難の時をしいるのが心苦しい。結果的には長州にかき廻されたわい」

「その点、確かに伊藤さんは先を読むのがうまい。しかし、板垣が旧自由党系と大同団結組を結集しつつある。



改進黨はこれらと与するものではないが、反体制においては変りはない。この分では、国会が開設されても、政府の案件はなかなか通りませまい」

「政局の不安定が続くかもしれぬのう。薩長も種切れになるかもしれぬが、それでは日本が困るのじゃ」

大隈は権力闘争の中にも、やはり日本の国体を見つめていた。

「その時こそ、もう一度大隈首相の出番が参りましようぞ。福沢さんもそう申しております」

「福沢がそう言いおったか」

大隈はこう言つて、声を出して笑つたが、傷口が痛むのかじつと切断された方の足をおさえていた。

「療養中に鋭気を養つておかねばなりません。わたしも今度こそ正真正銘の暇を戴きたい。書き物の続きもございますれば——」

矢野もこの一年を振り返つて、心底からそう思つていたが、

「政治というものは、厄介なものよのう」

と、大隈の述懐にも実感がこもつていた。

年が明けてから、党员もそろそろ本業に戻りつつあつ

たが、矢野は落ち着かなかつた。報知社への援助も一年の約束であつたが、大隈の快癒までは知らぬ顔も出来ずそのうち選挙でも始まれば、また引つ張り出されると、ふんぎりのつかぬ悩みは募るばかりであつた。

大隈の快方に合わせて、矢野がこれからの身の処し方を考え始めた頃、藤田が一年の歐洲視察から帰国した。

藤田は何はともあれ帰国挨拶のため、寒風をついて矢野邸を訪れた。

「大隈さんの遭難は、帰国の船に乗つて知らされました。政治の交渉事が暴挙によつて左右されるとは情けない。

英国議會も傍聴してきましたが、この分だと議會の運営もおぼつかない」

藤田は情けない風情であつた。

「紳士の国情が見えたであろう。大人と子供ほどの違いがあるが、今から議會制度をつくる国とでは、比べても致し方あるまい。同じ事が何度繰り返されるかわからぬが、今度ばかりはわしも疲れた。報知の援軍どころか、条約改正に振り回された挙句がこの様じゃ。大隈さんが一命をとりとめてよしとしなければならぬ」

「党员もがっかりしたでしょう」

「改進黨の受難時代がまた続くことになるが、選挙を控えて放置も出来ぬでろう」

矢野は疲れているせいか、政治の話は余りしたくないふうであった。

「見聞記が送れずに気ばかり焦りましたが、何しろ時間がなくて。見るところが多すぎました」

藤田は悪びれず、約束が果たせなかったことを詫びた。

「一年では無理かもしれぬ。大分博物館も廻ったらしいのう」

「この時とばかり欲張りしましたが、覚え書きに書きとめるのが精一杯でした。それにしても、国策として政府の手があれ程行き届いているとは恐れ入りました」

「百聞は一見に如かずとはよく言うたものだが、印象記も忘れぬうちにまとめた方がいい」

「そのつもりですが、府議会の因縁からこの度の選挙の準備もせねばならぬし、一年間の空白を埋めるためにも拍車をかけねばなりません」

「改進黨もまとめねばならぬぞ」

「矢野さんはどうされますか」

「わしか。わしは今度こそ少し暇をもらいたい。党勢拡

張のためにも、大分の方は箕浦に任せて、引退の時の決意を実現してみたい」

「世間は民間大臣を忘れませんよ」

「そのために何か方法はないかと考えているんじゃない」

二人の会話中も、藤田には矢野が真顔で暫く政治から離れたい思案を読みとれた。

「板垣さんも大分動き廻っているらしいと聞きましたが――」

「板垣さんか。板垣さんは、自由党系と後藤の大同団結組をまとめて、政府に対抗したい腹らしい。何れにしても議会は最初から荒れるわい。各党は小人数でも、まとめれば政府も脅威になる。福沢さんではないが、内閣は幾つつくっても足りぬらしい」

「繰り返すですか」

「わずらわしいが、それが政治というものだろう」

矢野は達観している様子であった。

「早速にも大隈さんを見舞わねば――」

と藤田が言いかけて、矢野はもう一人の病人を思い出していた。

「そうそう。沼間さんも寝こんでいる。一度見舞ったが

その後の病状も思わしくなくいらしい。見舞ってやると喜ぶわい」

「あの元氣者がー」

藤田も一年の変化をつくづく感じとっていた。

帰国後の藤田は多忙を極めた。挨拶廻りの合間には、改進黨の財源を扱った銀行の業務も見なければならず、選挙に向けては、府会議員の中から推薦を受けている、日本橋区の有力者である堀越留次郎等との打ち合わせはもとより、改進黨の委員として、党全体を総括せねばならなかった。留守中に生まれた照子を、ゆっくりあやす暇もなかった。

その間、外遊見聞記は選挙までにごうしてもまとめおきたかった。そして夜になると机にかじりつき、欧州上陸以来の雑記を分類し、風俗、政治、遊行の三篇に分けて、見聞したままを記述して、私見を書き加えた。遊行の最後には、ライン下りを诗情豊かにうたいあげている。

藤田は春先にこれを脱稿し、『観月叢話』と題して金港堂から出版することにした。

矢野は時折り大隈を見舞って、快方に向かう顔色をうかがいながら、これで自分の役目も終わった、今度こそ政治から開放されるという目処をつけていたが、悩みがないわけではなかった。明治十四年の政変、今度の遭難事件と、いつ何が起きるかわからない政変を二度三度経験すると、政界を避けられる方法はないかと、真剣に考えるようになっていた。好きな著述も、国論に関係するものを書く以上、全く政治に無縁とはいえず、「世は龍溪を捨てざるに」という現象が、矢野の影につきまっていた。矢野は「龍溪は世を捨てざるに」を実証しながら政治という魔手の及ばない妙手を模索していた。そして一計に思いつくと、胸に秘めて腹を固めつつあった。

大隈は、五月十三日、全快の報告を持って参内し、御礼を言上して一族郎党を喜ばしたが、遅れること四日、十七日には、内閣総理大臣山県有朋が内務大臣の兼任を解き、内閣改造が行われた日、改進黨の閥將沼間守一が不帰の客となった。

沼間は、矢野が慶応義塾の出身者で東洋議政会を組織する頃、弁護士仲間や有識者を集めて嚶鳴社を組織し、

大隈の傘下に入った熱血漢であった。若い頃の矢野は、治外法権や自由都市の話など、洋行帰りの博学の沼間から教えられるところが多かった。

慶事があれば不幸もあったが、二十七日、大隈の全快大園遊会が大隈邸で催された。この日は、呉越同舟、黒田はもとより前閣僚をはじめ、枢密顧問官や伊藤も顔を見せて大盛会であった。

矢野は挨拶のため、それとなく伊藤に近づいたが、伊藤の方が目ざとく矢野を見つけた。

「命拾いしてよかったのう、矢野」  
条約改正では最後に反対に廻った伊藤も、今日は上機嫌であった。

「これで役目も終わりほっと致しました。これからは好きなことが出来ます」

矢野は心からそう思っていた。

「そうか。民間大臣は今度こそ本当に引退するのか」

「伊藤さんもお口が悪い。つきましては、これから伊藤伯のお知恵を拝借しとうございます」

「なんと。わしの知恵。わしはのうお前さんの謀は怖いんじゃない。例の一件があるからのう」

伊藤はこう言って声高らかに笑った。例の一件とは、大隈の入閣に際して、矢野の発案で伊藤に渡した覚書のことである。

そこへ黒田前首相が寄ってきた。

「ご苦勞様でございます」

矢野は今日の訪問と条約改正の大隈援助に対して礼を言った。

「大隈も元気になってよかったのう」

黒田は例の調子で顎を突き出していた。

伊藤はその場を離れる時、矢野に親しげに応じた。

「矢野君。わしに知恵はないがのう、いつでも遊びにくるがよい。大隈ばかりを助けずに、たまにはわしにもお前さんの知恵をくれ」

矢野は苦笑したが、ここが伊藤博文の面目躍如たるところである。

一体矢野は、伊藤に何の相談事があったのであろうか。

この頃、藤田の『観月叢話』が完成し、矢野の手許にも届けられた。矢野は藤田の視点の異なる外遊記を、拾い読みながら自らの洋行時代をなつかしんだが、なぜ

か落ち着かなかった。

六月十日には、貴族院多額納税者議員の選挙が行われた。貴族院の成立については、議員に皇族及び公侯爵の有爵者、伯子男爵間の公選された代表者と国家に功勞あり、且つ学識あるものの中から特に勅選されたもの、並びに府県の多額納税者から選出された彼等の代表者が任ぜられた。

先ず多額納税者議員が互選され、七月一日には初の衆議院議員の選挙が行われることになった。そして勅選議員の選挙が終われば、いよいよ帝國議會開院の運びとなる。議事堂はすでに完成して東京の天空に聳え立ち、議會開会の暁には、万民ひとしく、藩閥内閣に代って、压制政治をなくし、租税は軽減され、民意による政府の出現を期待していた。

その期待は全国に広がっていた。

果して改進黨議員は何名選ばれるであろうか。政治に眼を閉じた矢野であったが、どこからか雑音が耳に入って、神経を高ぶらせた。ゆっくり本を読む気にもなれなかつた。

そして伊藤に相談をもちかけるには、時期を選ばねば

ならなかつた。早い方がよいか、それとも選挙の終わったあとがよいか、選挙結果には関係ないが、果して伊藤が何と言うか、迷いに迷う矢野であつた。